



Title	ADAPTATION OF CLASSICS IN CONTEMPORARY JAPANESE THEATER THROUGH THE PRISM OF INTERCULTURALISM
Author(s)	Kastylianchanka, Iryna
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105360
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (KASTYLIANCHANKA IRYNA)	
論文題名	ADAPTATION OF CLASSICS IN CONTEMPORARY JAPANESE THEATER THROUGH THE PRISM OF INTERCULTURALISM (現代日本演劇における古典作品の翻案—相互文化主義の観点から—)
論文内容の要旨 本論文は、古典作品の異文化間演劇翻案に関する諸問題に焦点を当てたものである。古典作品は、いかなる国においても演劇芸術の不可欠な構成要素として存在している。古代ギリシア文学やシェイクスピア、チェーホフの戯曲は、世界的に著名な演出家の作品に多大な影響を及ぼしてきた。しかしながら、日本の異文化間演劇研究においては、（研原名によって末松美知子、小林香、浜名恵美など）シェイクスピアの翻案が中心となる主な対象とされてきた。他方、小山内薫の業績を嚆矢として、ロシア文学および演劇文化もまた、現代日本演劇の発展に甚大な影響を与えてきた。加えて、異文化間演劇の研究において、多くの研究者は1980年代および1990年代に上演された作品を検証してきた。しかし、異文化間演劇は、その分析手法と同様に、時代とともに変容を遂げており、したがって過去四半世紀における日本の舞台における古典の異文化間翻案を分析する必要性が存在する。無論、本研究はこの期間に上演されたすべての公演を網羅するものではないが、我々が重要と考える複数の公演を用いて、日本演劇における異文化間主義の動向を反映することを企図している。 演劇史および演劇理論の文脈において、異文化間演劇の問題は最も複雑かつ興味深い課題の一つである。演劇における異文化間主義の主要な理論と実践は、長らく主としてヨーロッパ演劇の経験に基づき、それに従って普及してきた。歴史的に、日本における異文化間演劇は、明治維新以降の19世紀後半に開始された西洋支配および西洋化（アメリカ化を含む）の結果として生じた。1970年代の小劇場運動およびナショナリズムの拡大に伴い、日本の芸術家たちは、文化的アイデンティティの強化、伝統的演劇形式の復興、独自の様式的独自性の創出のために、意識的に異文化間主義を活用し始めた。その顕著な例として、鈴木忠志、太田省吾、蜷川幸雄といった演出家の功績が挙げられる。彼らの活動は日本演劇を多くの国々において卓越した地位へと押し上げ、それによってより広範なグローバルな演劇文化への参画を可能にした。 したがって、現代日本演劇においては、この現象を分析し、外国文学作品の舞台翻訳翻案に関する独自の分類—範疇と言説—を展開する必要性が存在する。 本論文の主要な目的は以下の通りである：(1) 異文化間演劇を理解するためのモデルを確立し、その妥当性を立証すること、そして(2) このモデルを道具として用いることにより、21世紀初頭における日本の演劇舞台における外国古典作品の異文化間解釈に関連する動向と概念を、作家主義演劇の発展という文脈において特定し、総括すること。 かくして、本研究の意義は、原典文学と芸術現象としての日本演劇との相互作用の原理に対する学術的分析の必要性によって規定される。これにより、演劇における異文化間性の発展における主要な動向をより精確に理解することが可能となり、演出家=翻案者の機能および他文化由来の文学テキストの具現化に対する演出的アプローチの特質を明らかにすることができる。 本論文は、序論、全四章からなる本論、および結論で構成される。序論および研究史において、研究主題の選択を正当化し、その意義と学術的新規性を明らかにし、目的を定式化し、当該問題の研究史を提示する。 第一章では、異文化間パフォーマンス研究の理論的基盤を分析する。第一節では、世界演劇実践における異文化間主義の発展における主要な時期を抽出し、検証する。第二節では、研究の範疇的・概念的装置を展開する。第三節では、しばしば相互に矛盾する多様な理論の分析に充てられる。日本の公演の分析におけるそれらの適用可能性も	

また考察される。そして、異文化間演劇の新たなモデル—多段階階段モデル—が提示される。第四節では、翻訳の諸問題およびそれが受容者の作品認識に及ぼす影響を扱う。

第二章では、古代テキストの翻案を分析する。第一節では、ピーター・ブルックおよび宮城聰によって解釈された古代インド叙事詩『マハーバーラタ』の二つの演出を検証する。第二節では、古代ギリシア悲劇、特に宮城聰演出の『アンティゴネ』の舞台解釈を論じる。

第三章は、シェイクスピア作品の異文化間具現化に焦点を当てる。第一節では、宮城聰による『オセロ』演出の背後にある概念を分析する。第二節では、蜷川幸雄および三浦基によって創作されたシェイクスピアの『コリオレイナス』の二つの解釈を検証する。

第四章は、ロシア作家による作品の舞台解釈に焦点を当てる。第一節は、野田秀樹、三浦基、フィリップ・グリーン演出によるフォードル・ドストエフスキーの小説『罪と罰』の異文化間舞台化に充てられる。第二節では、三浦基、ソン・ギウンによるアントン・チェーホフの戯曲『三人姉妹』の三つの演出を分析する。これらの例を用いて、著者はまた、日本の演出家の異文化間演劇世界がいかにか形成され、発展したかを明らかにする。

既存のモデルの大部分(パトリス・パヴィスの砂時計モデル、ルストム・パルーチャの振り子モデル、ジャクリーヌ・ローとヘレン・ギルバートの連続体モデルなど)は、テキストの文化と変容の媒介者(演出家)との関係という観点から演劇における異文化間主義を検証している。しかしながら、異文化間演劇は、創出された作品—すなわち公演—に基づいて、そしてより重要なことに、その公演の提示または提示に基づいて定義される。したがって、演劇における異文化間主義は、特にテキスト、公演、受容者の関係として捉えられるべきである。この関連において、新たなモデルを確立する必要性が生じる。このモデルは、原文化(テキスト)から目標文化(公演)への変容を理解するための経路を提示するものである。かくして、分岐型多段階階段モデルが出現する。

図32に示されるように、分岐型多段階階段モデルは、原文化としての文学作品の段階(1)から始まる。これを理解するための経路は「門」(2)から始まる。変容者および受容者(日本人、ヨーロッパ人、ロシア人、移民)のある原文化に属する。次に、我々は原典テキストを目標テキストに翻訳する概念(3)およびテキストとの作業(4)という主要な段階プラットフォームへと導かれる。その後、(a)イメージの解釈、(b)設定、(c)行為の時間、(d)出来事の順序、(e)主題の段階へと分岐する。これらはさらに、形式の選択(5)へと至る。これは、特定の演劇的・文化的伝統、または複数の演劇的伝統の組み合わせに基づいている。最終的に、階段は文化的コードの段階(6)において収斂する。この階段を横断することにより、我々は神殿に入る。すなわち、創出された舞台翻案の目標文化を理解するのである。このモデルを活用することにより、我々は現代日本演劇における古典作品の異文化間翻案を理解する経路に沿って段階的に上昇した。

かくして、現代日本演劇における古典作品の翻案の例を通じて、新たな分岐型多段階階段モデルは、テキストと翻訳者、テキストと演劇、変容者と受容者、テキストと観客の間の文化的相互作用の多様な経路を示すものである。したがって、本論文は、現代日本演劇における古典作品の異文化間翻案に関する初の包括的研究であり、古代ギリシアの劇作家およびシェイクスピアに基づく演出の分析のみならず、ロシア文学作品に由来する公演の検証をも包含している。著者は、演劇における異文化間主義の歴史と理論に関する広範な資料を収集し、体系化した。本研究は、外国作品の舞台翻案を一つの現象として学術的に解釈するものであり、それによって現代世界演劇における日本演劇の主要な発展傾向とより精確に特定することを可能にした。また、原典テキストの異文化間解釈が演劇作品で用いられる芸術的表現手段の拡大に及ぼす影響を跡づけるものである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (KASTYLIANCHANKA Iryna)				
	(職) 氏 名			
論文審査担当者	主 査	大阪大学	特任教授	永田 靖
	副 査	大阪大学	教授	伊東 信宏
	副 査	大阪大学	教授	中尾 薫
	副 査	大阪大学	講師	伊藤 寧美
論文審査の結果の要旨				
以下、本文別紙				

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： ADAPTATION OF CLASSICS IN CONTEMPORARY JAPANESE THEATER THROUGH
THE PRISM OF INTERCULTURALISM

学位申請者 KASTYLIANCHANKA Iryna

論文審査担当者

主査	大阪大学特任教授	永田 靖
副査	大阪大学教授	伊東 信宏
副査	大阪大学教授	中尾 薫
副査	大阪大学講師	伊藤 寧美

【論文内容の要旨】

本論文は、2000 年代以降約 20 年間の現代日本演劇における、インターカルチュラリズム演劇の特性の解明と分析モデルを提示することを目的とする。全体 4 章構成である。第 1 章ではインターカルチュラリズム演劇に関する先行研究を網羅的に検討し、20 世紀以降におけるそれらの演劇の主な時期と理論を概観しつつ、現代日本演劇を検討するための理論的整理を行う。その上で現代日本演劇におけるインターカルチュラリズムを検討する際の仮設モデルとして「分岐型多段階モデル」を提示する。第 2 章では、古代ギリシャ演劇を対象とし、一連の宮城聰演出『マハーバーラタ』上演から主に『マハーバーラタ～ナラ王の物語～』（2014）を取り上げ、同一空間での上演と観客の既存の記憶が、後続作品の受容に意味を付加することを指摘する。ここでパヴィスの砂時計モデルの限界を示し、観客を能動的解釈者と捉える立場から、創造と受容が分岐しつつ重なり得ることを説明する。さらに宮城『アンティゴネ』（2004）を分析し、水上舞台や石の象徴体系がギリシャ神話と日本神話を重ね合わせつつ同一化しない構造、演技者の役割分離が登場人物を二重化することなどを明らかにし、複数の源流文化の並存、文化コード解読の分岐、創造経路と受容経路の交差という特質を提示する。第 3 章ではシェイクスピア作品を扱う。能の形式を用いて脱文脈化を試みた宮城演出『ク・ナウカで夢幻的なオセロー』（2005）において、空間と時間の多層化によってハイブリッドな第四の次元を生成する過程を論じる。初演でのニカブ風意匠は植民地化・宗教支配の暗示として読まれたのに対し、再演（2018）では着物の老女像へ置換され、イスラムへの参照が日本・アジアの表象へと移動するなど、同一作品での異文化参照の再配置が確認される。また衣装・仮面・武具的要素の混入により、人物像や権力像が複雑化し、舞台は単なる「日本化」ではなく多重参照の場として立ち現れる。三浦基『コリオレイナス』（2012）では、仏教的意匠や仮面を用いて主人公を、罪を背負う僧として再構成して人物を類型化・普遍化することで、各国観客の文化的前提の違いが受容を分岐させる様相を示す。第 4 章はドストエフスキー『罪と罰』とチャーホフ『三人姉妹』の日本における翻案上演を取り上げる。野田秀樹演出『贗作 罪と罰』（1995）は舞台を幕末日本へ移し、政治的対立を前景化することで日本の倫理的現在を問う作品へと転換した。グリーン演出『罪と罰』（2019）はキリスト教的象徴を強調し、国際協働による複層的文化翻訳を提示する。三浦『罪と罰』（2020）は抽象的空間と身体の反復的身振りによって、時間・場所・文化を超える疎外感覚を創出する。

さらに三浦『三人姉妹』では、身体を環境の一部として配置し、「動けなさ」を空間構造によって可視化する一方、ソン・ギウン『外地の三人姉妹』は植民地期朝鮮を舞台に、日本・韓国・ロシアの三文化を繋ぎ、主題を文化的帰属の問題へと転位させる。言語の配置や歴史的文脈の介入は、国家間関係と個人のアイデンティティを重層的に交差させる。以上の分析を通して、現代日本演劇におけるインターカルチュラリズムは、原作の単純な日本化や異文化要素の装飾的引用ではなく、源泉の文化・演出家・上演形式・観客という複数の文化的回路が交分岐し、混じり合いながら意味を生成する動的過程であることを明らかにした。「分岐型多段階モデル」は、この分岐的で重層的な相互作用を可視化する理論的装置として、現代日本演劇における古典翻案の複雑性と可能性を提示するものである。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、20 世紀後半以降の演劇理論において重要な位置を占めてきた「インターカルチュラリズム演劇」を主題とし、とりわけ現代日本演劇における世界古典の主要な翻案実践を対象に、その理論的枠組みと具体的手法を包括的に検討したものである。従来の研究が、特定の演出家や単一作品に即した事例分析、あるいは理論史的整理にとどまりがちであったのに対し、本論文は、理論・方法・実践を横断する独自の分析モデルを提示し、それを複数の具体的上演に適用することで、インターカルチュラリズム演劇研究に新たな視座を与えている。

本論文では、パトリス・パヴィスの砂時計モデル、ルストム・パルーチャの振り子モデル、ロー&ギルバートの連続体モデルといった既存理論を批判的に検討した上で、「分岐型多段階モデル」という独自の理論枠組みを提示した点は評価される。このモデルは、異文化翻案を線形的な「移植」や「翻訳」としてではなく、複数の文化的入口から分岐的・反復的に到達される過程として捉え、テキスト、上演、創作者、観客の関係性を立体的に可視化する点において、また解釈において複数の読解経路が併存しうることを前提とした点において、現代演劇の実態に即した柔軟な分析装置として評価できる。また、インド叙事詩、ギリシア悲劇、シェイクスピア、ドストエフスキー、チェーホフといった世界古典を対象に、宮城聡、鈴木忠志、蜷川幸雄、野田秀樹、三浦基、ソン・ギウンらの実践を丹念に読み解き、テキスト操作、身体表象、時間構成、文化コードの変容といった諸側面を具体的に分析し、同一テキストが場所の記憶や上演様式の差異を通じて別の比較の強制を生み出すこと、形式（能形式化・儀礼化）や俳優システム、文化コードの配置が、観客側の知覚の回路を変化させうること、さらに第三文化の媒介（韓国劇作家やイギリス人作家による翻案等）が翻案の流れを複雑化することなど、現代上演が抱える複雑さを具体的な舞台要素に即して丁寧に捉えようとする姿勢が一貫しており、上演分析として説得力がある。一方で課題も指摘できる。提示されたモデル自体が具象性を含み文化的誤解を生みやすいこと、またその有効性が主として筆者自身の分析事例によって裏付けられており、モデルの汎用性や再現可能性については今後の検証がさらに必要なこと。加えてインターカルチュラリズムの定義や作品選択の基準、仏教用語の使用、またジェンダー論、ポスト植民地主義論、翻案論への言及が見られないなど、今後の研究深化においてさらに整理検討が望まれる点も指摘された。

このような課題はあるものの、本論文は、総じて現代日本演劇における古典の異文化的翻案の諸問題を、理論的にも実証的にも高い水準で解明した研究であり、現代演劇研究に多大な学術的貢献をなすものと考えられる。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。